

英 文 法

ビフォー&アフター【改訂新版】

関西大学名誉教授

豊永彰

南雲堂



改訂新版への序

本書が産声をあげたのは、2003年3月14日であった。2023年には20歳の節目を迎えることになる。本書の初版が刊行された年に生まれた子どもは、すでに大学生にまでなっていると想うと長い期間、毎年多くの英語学習者が本書を携え、学習に取り組んでくれていたことに感慨無量の思いがする。

長きにわたり多くの人々に受け入れられてきた本書ではあるが、著者自身、40年にわたって英語教師をしながら、〈不定詞 (infinitive)〉に関する内外の英語文法書のその説明には、懇切丁寧であっても、その本質とされることにどこか不明瞭さが残るものとなっていた。杉山忠一東京大学名誉教授の「英文法詳解」の説明の中にその解決に至るヒントが示されている感触を得てはいたのであるが、OEDで何の気なしに“infinitive”の項目を引いたところ、まさにズバリ、その本質が定義されており、積年の暗雲が一気に取り払われたのである。そこで英語を学んでいる人たちにも〈不定詞〉の本質を早く理解してもらいたい一心から、出版社の方に改訂版の刊行を打診したところ、幸いにも快諾をいただき、この改訂新版の発刊に至った次第である。

人には、それぞれその人の人生があるように、書籍にもその本生があるように思う。どうか本書の長所を見つけていただき、ご自身の学生時代だけでなく、そのお子さんや、お孫さんにまで代々愛されるようになってもらえれば、著者としてこんなにも嬉しいことはない。

※ OED Oxford English Dictionary

はじめに

筆者が英語を職業として教えるようになってから40年以上がすぎた。大阪府立東住吉高等学校教諭を振出しに、専任校であった関西大学の学生はもちろんのこと、今日まで高津高校 [定時制]、NHK学園、龍谷大学、大阪経済大学、大阪市立大学、大阪大学、近畿大学、奈良教育大学、同志社大学、成蹊女子短期大学、帝塚山学院大学で教えた学生の総数は何万という数になる。その間私の頭をずっと占めていたことは、どう教えれば早く英語がマスターできるかということであった。いわゆる英語ができないとか、英語が嫌いという学生達は、当然のことだが**基本文法を知らない**。つまり英語のルールを知らないのである。これはルールを知らないで野球を見たり、将棋を指そうとするようなもので、分かるはずもなければ面白いはずもない。まず、野球や将棋を自分でしたり、見て楽しむためにはそのルールを知らなければならない。そして基本ルールだけでなく、どのピッチャーの得意球は何だとか、どのバッターはどの球に弱いとか、どのチームの監督はどういう性格でどんな手を打つかといったように、野球についての知識が深くなればなるほど面白味がふえてくる。英語もまったく同じことである。

それでは、英語の最も基本となるルールとは何か。それは**8品詞 (Eight Parts of Speech)**である。英語の語句は、それぞれ文中では8種類の働きをする。たったの8種類である。中学・高校で6年間、日数にして延べ2190日をかけてもなお、この8種類の働きをキチンと頭に入れないで英語をやっている人の方がずっと多いのである。何と驚くべきことではないか。それで英語が分かるはずがないではないか。近頃の実用英語重視の流れに乗って、文法を軽視し生徒に出発点となる8品詞の定義を徹底的にたたき込まないで、つまり基本ルールを教え込まないでどうして生徒に英語を理解させることができるだろうか。8種類の働きというのは偶然、将棋の駒の種類と同数なのである。つまり、王将・金将・銀将・桂馬・香車・飛車・角・歩である。これらの各駒の働きを知らないでは将棋を指せないの

は当然のことである。したがって英語をマスターしようとする者は、まず出発点となるこの8品詞の定義をしっかりと頭にたたき込むことである。

先にも述べたように、本書はいかに早く、しかも分かりやすく英語のルールをマスターするかという観点から書いている。それでルールもできるだけ覚えやすくするために、**駄じゃれ**や**語呂合わせ**を活用したり、色々表現を工夫している。しかし、そういうものは単なる便法であるから、自分にもっと記憶しやすい方法があれば、自分流の覚え方でやってもらえばよい。また、文法事項の配列も筆者の経験に基づいて最善と思われるようにしてある。そのために学校で使う教科書とは順序が違うかも知れないが、まず第1章と第2章をキチンと修得すれば、後は教科書で習う順番にしたがって各項目をやってもらって結構である。

本書の特色と使い方

- (1) **文法用語の説明**：‘品詞’，‘分詞’，‘直説法’，‘副詞的目的格’など，日本語でありながらその意味がよくわからない文法用語についての説明を加えた。「名は体を表す」という諺があるように，名称の意味を知ることがその文法事項の本質を知る上で極めて重要だと考えるからである。
- (2) **記憶法**：「はじめに」のところでも述べたように，是非記憶をしておいた方がよい事柄は，記憶法として筆者自身が若い頃に工夫した方法を参考として示してある。歴史の年号や電話番号などと同じで何の工夫もせずに記憶することは労多くして功少なしである。何か覚え易い形にして記憶すると忘れにくい。しかし，人間はそれぞれ経験や趣味が違うからAにとっては覚え易くてもBにとってはそうでない場合もあると思われる。そういうときは自分で工夫して自分にとって一番よい方法を考えればよい。
- (3) **口語体と文章体**：日常の会話などでよく用いられる平易な表現は<口語体>として，また形式ばった，堅苦しい表現で，普通書き言葉にしか用いられないような表現は<文章体>として示してある。特にどちらの表示もしていない表現は，口語でも文語でも用いるということである。
- (4) **<英>と<米>**：イギリスに特有の語や表現とされているものは<英>で，アメリカに特有の表現は<米>で示した。しかし，‘特有’といっても他方の国では‘絶対’に使わないということではない。
- (5) **勉強法**：ある科目をマスターしようとするとき，書かれてあることをやみくもに暗記しようとする人がいる。これは一番まずいやり方で，面白くもなければ理解も進まない。まず書かれてあることがはたして本当だろうかと**疑ってかかることが大事**なのだ。例えば，英語の<文>の定義として「2つ以上の語が集まって一つのまとまった思想（考え）を表すもの」と書かれているとする。そうするとそれをお経のように丸暗記しようとする，退屈だし何も根本的なことが理解されない。そうではなく，「なぜ2つ以上なければいけないのか，Yes.（はい），No.（いいえ），Go（行け）というような1語だけでは<文>でいいのかというふうに疑問をもって考えていく。そうすると，その考えている過程で<文>が2つ以上の語が必要だということは，理解はともかくとして自然に記憶されることになる。そう考えながら次に進むと，<文>は主題になる部分と，それについて述べる部分からなると書いてある。そうすると主部に最低1語，述部に最低1語が必要だから，なるほど2つ以上の語がなければいけないのだということが理解される。後段の「まとまった思想（考え）を表すもの」は，これは疑問の持ちようがないほど当然のことであるが，一応「まとまっていなかったらどうなる」と疑っても決して悪いことではない。「は太郎を犬せ

た走ら」ではまったく意味をなさないから、こんなものが<文>とは言えないことは明らかである。そこまでは比較的簡単に理解できても、Yes., No., Go., の1語が<文>の定義に照らして<文>と言えるのかどうか分からないかも知れない。わからなくても常にその疑問を持ち続けて学習していくと、主部の中心は名詞であり、述部の中心が動詞であること、そして辞書を引けば「はい」「いいえ」というときのYes., No. は副詞であることがわかると、ああこれは主語と動詞が省かれてYes, (it is)., No, (he did not). のような括弧の部分が省略されているということが理解できる。最後にGoであるがこれも命令文であること、命令は普通話し相手にするものだから主語の (You) が省かれていることがわかれば、腹の底から<文>の定義を理解したことになり、そのときは本当に嬉しくなる。下らぬテレビ番組などでは得られない知的な喜びとなる。

また、各文法事項には例文が必ず挙げられているから、比較的覚え易い短い例文を最低一つは覚えること。そうすると実際の英文を読んでいるときにすぐその応用がきくからである。

最後に、各品詞ごとに正確な意味を覚えること。英語ができないという人はいい加減な意味で覚えている。beautyもbeautifulも beautifullyも全部‘美しい’と思っている。beautyは名詞で「美」「美人」という意味であり、beautifulは形容詞で「美しい」という意味であり、beautifullyは副詞で「美しく」「見事に」という意味である。いくら文法事項を学んでも各単語の品詞とそれに対応する意味を正確に知らなければ本当の役には立たないのである。

(6) 注意事項

◎本書の対象：本書は英文法の知識が十分でない人を念頭において作成した。英文法の基本となる部分を扱っている。すべての学問は基礎が最も重要であり、基礎がしっかりしていないとその上に大建造物を構築することはできない。仮に毎日3ページずつ読むとして、単純計算で半年で読み終えることができる。しかし、1回読むだけでは不十分であって、すべての基本図書は真剣に最低3回は徹底的に読む必要がある。

2回目・3回目は1回目ほど時間がかからないから大体1年見ておけばほぼ完全にマスターできる。

◎例文：本書の例文は筆者が集めたものの他に、どの参考書にも見られるような代表的な例文を国内・国外の参考書からも引用している。本書は研究書ではなく参考書であるから、ごく一部を除いて一々引用箇所を示していないが、この場を借りてお礼を申し上げておきたい。

目次

改訂版への序	3
はじめに	5
本書の特色と使い方	7
第1章 8品詞	10
第2章 文とその構成要素	16
第3章 文型と文の種類	27
第4章 句と節	37
第5章 動詞と動詞の活用	44
第6章 時制(完了形・進行形を含む)	61
第7章 (受動)態	88
第8章 助動詞	104
第9章 (叙)法	135
第10章 否定	149
第11章 名詞	158
第12章 代名詞	187
第13章 疑問詞	220
第14章 関係詞	233
第15章 形容詞	254
第16章 限定詞	274
第17章 副詞	294
第18章 比較	314
第19章 不定詞	332
第20章 分詞	359
第21章 動名詞	374
第22章 前置詞	391
第23章 接続詞と節	408
第24章 呼応	434
第25章 時制の一致と話法	442
第26章 倒置・省略・強調	458
第27章 文の転換	471
解答編	483
索引	500

8 品詞 (Eight Parts of Speech)



<品詞>の‘品’とは昔の日本語で「種類・たぐい」という意味を持っていた。
‘詞’は「ことば・語」という意味であるから、**8品詞**とは「8種類の語」という意味になる。



品詞

語 (word) は文中における役割によって次の8品詞に分類される。

1. 名詞

(Noun)

人または事物の名称を表す語。文中で**主語・目的語・補語**になる。

John made his son a pilot. (ジョンは息子を操縦士にした)

2. 代名詞

(Pronoun)

名詞の代わりをする語 (したがって名詞と同じく文中で、主語・目的語・補語となる)。

He made her happy. (彼は彼女を幸せにした)

3. 形容詞

(Adjective)

名詞・代名詞を限定・修飾する語。

This is a good watch. (これはいい時計だ)

He is honest. (彼は正直だ)

4. 副詞

(Adverb)

動詞・形容詞・他の副詞を限定・修飾する語。

The student works hard. (あの学生はよく勉強する)

He speaks English very well. (彼はとても上手に英語を話す)

The girl is very pretty. (あの娘はとても綺麗だ)

5. 動詞

(Verb)

動作・状態を表す語。

They learn English. (彼等は英語を学ぶ)

He is honest. (彼は正直だ)

6. 前置詞

(Preposition)

名詞・代名詞の前に置いて、それらと共に全体として1つの品詞の働きをする語。

【形容詞相当】

The book on the desk is mine. (机の上の本は僕のだ)

【副詞相当】

He spoke about it. (彼はそのことについて話した)

1. 名詞

(副詞的目的格)

She will come home **tomorrow**.(彼女は**明日**帰宅するでしょう)

2. 名詞

(属格副詞)

He **sometimes** goes to the seaside to refresh himself.(彼は**時々**気晴らしに海岸へ出かけます)

【注】属格とは今日の所有格に相当する。sometimes, always などの -s は複数の -s ではなく、今日の 's に相当する。

3. 前置詞の導く句

My villa faces **on the sea**.(私の別荘は**海**に面している)

4. 不定詞

(副詞的用法)

She went to the beautyshop **to have her hair cut**.(彼女は**髪をカット**しに美容院へ行った)

5. 分詞

(分詞構文)

Not knowing what to do, Mary asked her mother's advice. ▶▶▶03

(どうしてよいか分からなかったので、メアリーは母の助言を求めた)

6. 副詞節

When she was young, she was called 'Marilyn Monroe of Japan'.

(彼女は**若い頃** '日本のマリリン・モンロー' と呼ばれた)

以上は異なる品詞や文法単位が相当語句になる場合を挙げた。次に同じ1つの語が中心になった相当語句の場合である。

Women are tender-hearted. (女性は気立てが優しい)

(名 詞)

All the young women in the office are tender-hearted.

(名 詞 句)

(この**職場の若い女性**は皆気立てが優しい)

All the young women who come to work in the office

(名 詞 節)

are tender-hearted.

(この**職場に働きにくる若い女性**は皆気立てが優しい)

最初の文は名詞 *women* 1語が主語の働きをしている。第2, 第3の文では *women* を限定・修飾する語句が次第に多くなっているが、全体では *women* が中心となった名詞相当語句で、すべて主部(語)となっている。このような相当語句は中心の品詞の性質を示す。

練習問題 1


A 次の文中の下線を引いた語の品詞を言いなさい。

- (1) He did his work very well.
- (2) John worked hard in digging a well.
- (3) It is five minutes from here to the station.
- (4) No one trusts Tom, because he often tells lies.
- (5) After two weeks, he broke a long fast.
- (6) He caught the fast train at 9:00 p.m. after he ran twenty minutes.
- (7) Bill got up late in the morning, so he ran to school as fast as he could.
- (8) When we were taking a walk, we saw a cat sleeping up on a tree.
- (9) I had hardly spoken to her when she ran out of the house.
- (10) Why, of course, they arrived there safely.

B 下線の語に注意しながら日本語に訳しなさい。

- (1) It is nothing but a dream.
- (2) He said so but in jest.
- (3) She didn't go out because of the snow.
- (4) John found the book easy.
- (5) John found the book easily.
- (6) They went in to dinner.
- (7) The cat was in the basket.
- (8) He sat up late at night.
- (9) She was late for school.
- (10) Mary stayed up till late.

C 主語には (は, が), 目的語には (を, に), 補語には (で, と, に) と, 助詞に注意して次の英文を日本語に直しなさい。

- (1) People elected him Mayor.
- (2) I have never heard her sing.
- (3) She was reading a book when I visited her.
- (4) I will give you one of these two books.
- (5) There is someone at the door.
- (6) Who wanted the key of the room?
- (7) How happy they seemed to me!
- (8) She opened the letter as soon as she received it.
- (9) She was named Catherine after her aunt. 04
- (10) I asked him what he was doing.

D 次の文中の文法・語法上の誤りを正しなさい。

- (1) I saw him attended at the meeting.
- (2) What a kind instructor is she!
- (3) I have lost my umbrella; I think I must buy it.
- (4) I apologize you for forgetting our appointment.
- (5) I am pleasant to hear that he has succeeded the examination.
- (6) Comparing with his brother, he is not so smart.
- (7) You can build as large house as you like.

文 (Sentence) とその構成要素



<家>が成り立つためには、玄関（入口）・台所・食堂・居間・寝室・トイレが絶対に必要である。英語の<文>が成り立つためには絶対必要な要素は何だろうか？

文 (Sentence)

2つ以上の語が集まって、まとまった1つの思考内容を表すものを文という。

Dogs bark. (犬は吠える)

This is a lovely view. (これは美しい眺めだ)

He made a large box. (彼は大きな箱を作った)

John gave me a good book. (ジョンは僕にいい本をくれた)

The man called me a coward. (あの男は僕を臆病者呼ばわりした)

質問 何故2つ以上の語が必要なのか考えてみよう。Yes, No, Certainlyのように1語で終わる場合は文ではないのか。

01 主部 (Subject) と述部 (Predicate)

文はある人や事物を主題とし、それについて何かを述べるのが普通である。主題となる部分を主部、それについて述べる部分を述部という。つまり文は2部分からなる。

文 = **主部** + **述部**

上の英文を主部と述部に分けると次のようになる。

主 部	述 部
Dogs	bark.
This	is a lovely view.
He	made a large box.
John	gave me a good book.
The man	called me a coward.

02 主語 (Subject Word) と述語動詞 (Predicate Verb)

主部の中心となる語を主語といい、述部の中心となる語を述語動詞という。

01 の例文で言うと、Dogs, This, He, John, man が主語であり、bark,

is, made, gave, called がそれぞれ述語動詞である。主語には、第1章品詞のところで述べた名詞と代名詞、その他の名詞相当語句 (Noun Equivalents) があり、述語動詞には動詞になる。主語を日本語に直す時には、「～は」、または「～が」をつける。

03 目的語 (Object)

動詞の表す**行為の対象**(目的)となるものを**目的語**(object)という。目的語になるのも、**名詞・代名詞・その他の名詞相当語句**である。日本語に直す時には「～を」か「～に」をつける。

He opened *the window*. (彼は窓を開けた)

We hope *world peace*. (我々は世界平和を望む)

I met *him* in the street. (私は通りで彼に出会った)

open (開ける), hope (希望する), meet (出会う) という動詞の行為の対象となっているのがそれぞれ *the window*, *world peace*, *him* で、これらを**目的語** (object) という。対象となるものは具体的なものだけでなく抽象的なものも含まれる。このように行為が他のものに及んでいく動詞を**他動詞** (transitive verb) といい、sleep (眠る), is (…である) のように行為が他に及んでいかず、自分だけにとどまって目的語をとらない動詞を**自動詞** (intransitive verb) という。

【注】辞書では、他動詞 (transitive verb) は vt, 自動詞 (intransitive verb) は vi と省略して表される。



- (注意) ①主語を S, 動詞を V, 目的語を O とすると、世界の言語は英語のように SVO となるか、日本語のように SOV となるかのどちらかである。英語と日本語のこの基本的な語順の違いをしっかりと頭に入れておくこと。しかも英語の文ではこの文型 (P.27 01 参照) が一番多いから、動詞 (be 動詞を除いて) の後に名詞や代名詞その他の名詞相当語句があれば目的語と見てよい場合がきわめて多いということになる。
- ② lay (横たえる), set (据える), raise (上げる) という行為は必ず対象を必要とする他動詞である。例えば、「からだを横たえる」「机を据える」「賃金を上げる」というようにである。一方、lie (横たわる), sit (座る), rise (上がる) という動詞は行為の対象が必要でなく、本来自分のみにとどまる。「私は横たわった (横になった)」、「私は座った」、「物価が上がった」というのはそれだけで意味がわかる。しかし「私は横たえた」、「私は据えた」、「私は上げた」ではそれらの行為の対象である**何を**という目的語がなければ意味が不十分でまとまった意味にならない。したがって英語を学ぶ

時には、常にその動詞が**他動詞**か**自動詞**かという区別を強く意識することが必要である。英語が分からないという学生にはこの他動詞、自動詞の区別がつかない人が大変多い。また、学びはじめの者は I lay on the grass. (芝生に横になった), I sat on the chair. (椅子に座った) という場合に、「横になった」とか「座った」という行為が芝生や椅子に及んでいるから他動詞ではないのかというふうに考えがちである。しかし上に述べたようにこれらの動詞は、「私は横になった」「私は座った」だけで「芝生に」とか「椅子に」といった前置詞以下の語句がなくても文型の意味としては完全であって、必ず必要とするものではない。この点が他動詞の場合と基本的に違うのである。また形の上では、他動詞の場合と違って動詞と名詞の間に**前置詞が入っていること**に留意すること。

04 直接目的語 (Direct Object) と間接目的語 (Indirect Object)

動詞には、同時に目的語を2つとる**授与動詞** (dative verb) というのがある。2つの目的語の1つを直接目的語 (direct object), もう1つを間接目的語 (indirect object) という。だいたい日本語に直して「**～を**」となるのが直接目的語、「**～に**」となるのが間接目的語である。例えば, I gave him a book. (僕は彼**に**本**を**1冊やった) という場合に、「やる」という行為は先に本を手に取り、次に彼に手渡すから、彼は2番目——つまり**間接的**に行為の対象になる。したがって「物」が直接、「人」が間接になる場合が多い。

He lent her his car. (彼は彼女**に**車**を**貸した)

She paid me ten pounds. (彼女は私**に**10ポンド**を**支払った)

記述法

直接目的語と間接目的語の順序は、間接目的語が先で、直接目的語が後になる。つまり、「動詞 + **カンセツ** + **チヨクセツ**」になるから、授与動詞の目的語の語順は“**どうし** (動詞) ても **カチ** (勝ち)”と覚えておく (I gave him a book.)。ただし、この語順は**焦点** (下記参照) の置き方によって変わることがある。間接目的語を直接目的語の後へまわす場合は、間接目的語の前に適当前置詞 (to, for など) を必要とする。(I gave a book **to** him.)

(文末)焦点 : 文は何らかの情報を伝えるために用いられるのが普通であり、その場合一般的に、文は**旧情報** (話し手と聞き手が既に知っている情報) と**新情報** (聞き手がまだ知らない情報) とから成っている。そのうち相手に伝えたい新情報のことを**焦点** (focus) という。英語ではこの新情報は文末にくることが多い。この文末に来る焦点のことを特に**文末焦点**と呼ぶ。例えば、

(A) Who (m) did you give the book? (君は**誰に**その本をあげたの)

という疑問文では you gave (**someone**) the book が旧情報で、話し手は‘誰に’という情報を求めている。そこで聞かれた方は、

(B) I gave it **to John**.

と答え、焦点である新情報は文末に置かれる。

もし、旧情報が you gave John (**something**) であって、話し手が‘何を’という情報を求めている場合は、

(A) What did you give John?

と問い、聞き手は

(B) I gave him **a book**.

と答えて、a book が新情報となり、文末にくる。このように授与動詞は目的語を2つ取るが、S + V + IO + DO となるか S + V + DO + to (for) + IO となるかは焦点が何かによってその語順が決まるのである。

05 補語 (Complement)

1. 主格補語

Dogs bark. (犬は吠える) というような文は、それだけで完全なまとまった意味を表している。しかし、I am ... (私は…です) とか He became... (彼は…になった) というような文は、このままではまとまった意味を表さず、「...」部に適当な語が来て初めて完全な意味になる。

I am **a nurse**. (私は看護師です)

He became **a teacher**. (彼は先生になった)

このように、動詞の意味の足りないところを満たして**完全な文にするために補う語**を補語 (Complement) という。補語になる語は、名詞、代名詞、形容詞、およびそれらに相当する語句である。日本語に直すときは原則として「～で」「～と」「～に」を付ける。

She is **a secretary**. (彼女は秘書です)

He is **cheerful**. (彼は快活です)

これらの補語は、主語の職業、内容、性質など、主語について説明しているから**主格補語** (subjective complement) という。そして、主格補語を必要とする動詞を**不完全自動詞**という。不完全自動詞には be (am, are, is, was, were), appear, become, get, grow, look, seem などがある。主格補語は主語と広い意味でイコールの関係に立つ。

She = secretary ; He = pleasant

この点で、完全他動詞 P.45, 02 (1) の場合と区別がつく。

He became a soldier. (彼は軍人になった)

[He = soldier (同一人物) → 主格補語]

He met a soldier. (彼は軍人に出会った)

[He ≠ soldier (別人) → 目的語]

2. 目的格補語

He made his son (彼は息子を…にした), We elected him (我々は彼を…に選んだ)。主格補語の場合と同じように、これらの動詞は目的語について説明する適当な語を補わないと、まとまった意味を成さない。その働きをする語を目的格補語 (objective complement) という。

He made his son **a soldier**. (彼は息子を軍人にした)

We elected him **chairman**. (我々は彼を議長に選んだ)

They called him **Billy**. (彼らは彼をビリーと呼んだ)

そして、目的格補語を必要とする動詞を不完全他動詞といい、appoint, call, elect, find, get, have, hear, make, name, seeなどの動詞が用いられる。

目的格補語は目的語と広い意味でイコールの関係に立つ。

his son = soldier ; him = chairman ; him = Billy

これによって、授与動詞の目的語2つの場合と区別がつく。

She gave me a book. [me ≠ book]

3. 準主格補語と準目的格補語

He went **an enemy** and returned **a friend**.

(彼は敵として去り、味方として帰ってきた)

この文の went ‘去った’, returned ‘帰ってきた’ は完全自動詞であるから本来補語を必要とするものではない。そうすると enemy や friend という名詞は本来は不要であるけれども、やはり ‘去った’ とき、 ‘帰ってきた’ ときの主語の状態を説明している。このような働きをする補語を、主格補語に準ずるものとして、準主格補語という。

You should drink tea **hot**.

(紅茶は熱くして飲む方がよい)

この文の drink ‘～を飲む’ は完全他動詞であるから本来目的格補語を必要とするものではない。そうすると hot という形容詞は本来不要であるけれども、やはり飲むときの紅茶の状態を述べている。このような働きをする補語を準目的格補語という。



(注意)

以上、主語・目的語・補語について基本的な働きを説明したが、英語を日本語に直す時、主語には「～は」または「～が」、目的語には「～を」または「～に」、補語には「～で」、「～と」、「～に」の助詞をつけるという原則を厳守してもらいたい。英語のできない人はこの基本事項がグラツキテいて、語順や語の働きに関係なく自分勝手な助詞をつける。例えば、He made his son a soldier. を「彼は軍人さんを息子にした」といったふう間違っているのである。したがって、英文を読んで日本語に直さなくても分かる、つまり直読直解ができるようになるまではこの原則をしっかりと守ることである。そのため少し日本語訳が堅くなる場合があっても基礎を確立するためには止むを得ない。つまりまず直訳をして、それから意識するようにすればよいのである。

I like apples very much.

(「私はリンゴを大いに好む」→「私はリンゴが大好きだ」)

Rain prevented me from going there.

(「雨が私をそこに行くことから妨げた」→「雨のために(が降ったので)私はそこへ行けなかった」)

教師の中には、自分の訳に酔って初級段階の生徒の直訳をヘタな訳だと言って退ける人がいるが、これは生徒の学習を混乱させるだけである。基礎学習の段階では絶対に避けなければいけない。これは体操で基礎の技術を修得していないのに、最初からウルトラCの技術を要求し、かえって再起不能な怪我をさせるようなものである。何事も基礎練習を徹底的にやり、それをマスターしてから順次高度な段階に進んで行けばよい。

06 修飾語 (Modifier)

8品詞のところでも述べた形容詞・副詞およびそれらの相当語句をまとめて修飾語 (modifier) という。

He is an **able** man. (彼は有能な男だ)

This flower is **very** beautiful. (この花はとても美しい)

She learns English **hard**. (彼女は一生懸命英語を学習する)



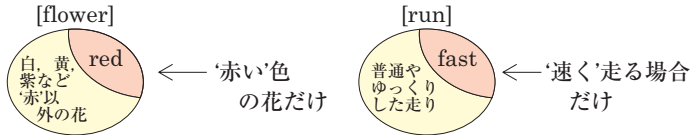
(注意)

修飾という言葉のイメージにとらわれてはいけない。この言葉は何か良いプラスイメージを持って飾り立てるような印象を与え、事実 a beautiful girl (美しい少女), She speaks French fluently. (彼女はフランス語を滑らかに話す) というふうな場合ももちろんあるが、a mean fellow (いやらしい奴), He spoke falteringly. (彼はたどたどしく話した) のように良くない印象の時にも用いられる。Modifier という英語の訳語は限定語とも呼んだ方がより正しい理解につながると思われる。つまり、ただ単に a flower (花) と

か run (走る) という場合は、例えば tulip, pansy, lily などその他すべての花、また色も白い花、黄色い花、その他‘花’と呼ばれるものすべてを指す。同様に、run は‘走る’という動作に含まれるすべての走る動作を表す語である。



ところが、a red flower とか He runs fast と modifier がつくと、



に**限定**される。このように名詞（および名詞相当語句）を限定する働きをするものを形容詞、動詞・形容詞・他の副詞（およびそれらの相当語句）を限定する働きをするものを副詞と呼び、そのような形容詞・副詞の働きをするものを全部まとめて修飾語 (modifiers) というのである。したがって、a book **on the desk** (机の上の本) という場合、**on the desk** は全体で a book という名詞を限定しているから、a red flower の red と同様に形容詞と同じ修飾語の働きをしていることになる。



文の要素 (Elements of Sentence)

主語・(述語) 動詞・目的語・補語・修飾語という語の文中における主要な文法上の働きの面からではなく、文 (sentence) という構造体の構成要素 (elements) を重要さの面から見る時、次の3要素がある。

- * 主要素 (Principal Elements)
- * 従要素 (Subordinate Elements)
- * 独立要素 (Independent Elements)

07 主要素

文を構成するのに絶対必要な要素：**主語**・(述語) **動詞**・**目的語**・**補語**。これは次章で述べる5文型を考えるとすぐに理解できる。

(主語を S, (述語) 動詞を V, 目的語を O, 補語を C で表す)

第1文型	S + V
第2文型	S + V + C
第3文型	S + V + O
第4文型	S + V + O + O
第5文型	S + V + O + C

まず、主語 (S) と動詞 (V) は、すべての文に欠かせないことはすぐわかる。しかし主語と動詞だけでは第1文型しかできない。第2文型以下の文を構成するためには目的語 (O) と補語 (C) も必要である。

08 従要素

絶対に必要な要素ではないが、しばしば2次的に使用される要素 (文型の構成には関係がないが、主要素を修飾・限定する要素)：**修飾語** (形容詞・副詞・それらの相当語句)、および**連結詞**

- Birds sing. (第1文型) → Birds sing **merrily**.
 He is a soldier. (第2文型) → He is a **brave** soldier.



(注意)

第15章でも述べるが、形容詞は補語として主要素になる場合と、修飾語として従要素になる場合があるので注意が必要である。従要素のときはイタリック体で示してある。

She is **tall**. (第2文型) → She is a *tall* girl. (第2文型)

S V C S V C

(彼女は背が高い) (彼女は背の高い少女です)

His parents made their son **good**. (第5文型)

S V O C

(彼の両親は息子を善良な人にした)

→ He will make her *a good* wife.

S V O C

(彼は彼女を良妻にしたてるだろう)

09 独立要素

文中の他の語と関係なく、独立して用いられる語句：間投詞・呼びかけ語。

Oh! What shall I do? (おお、私はどうしたらよいのか?)

You had better not do that, **John**. (ジョン、そんなことはしない方がいいよ)

◆ 文型の決定

一見長い文章でも、従要素と独立要素を除くと主要素だけが残る、5文型のどれかが分かる。

The president of the United States, Martin Van Buren,

S (形容詞句) Sと同格

smiled and waved to the crowd in the small town

V V (副詞句) (形容詞句)

that he was passing through.


(形容詞節)

(合衆国大統領マーチン・バン・ビューレンは彼が通過している小さな町の群衆に向かって、にっこりと笑って手を振った)

この文の従要素は波線を引いた部分であり、*and*を除いて他は全部修飾語句である。残る名詞 *president* が主語であり、*Martin Van Buren* はその主語を説明する同格の固有名詞である。そして *smiled* と *waved* が述語動詞であるから、結局この文はS+Vの**第1文型**となる。

練習問題 2



A 次の文の主語・(述語)動詞・目的語・補語を指摘しなさい(ただし、前置詞の目的語は除く)。

- (1) He suddenly rose from his seat and asked a sharp question.
- (2) I met the great man at the end of his life.
- (3) Her secretary probably writes all her letters.
- (4) The general may become a well-known figure in American history.
- (5) He handed her the mysterious letter.
- (6) They named the ship 'Queen Mary'.
- (7) They found the place a prosperous village.
- (8) The right kind of food is important for your health.
- (9) He succeeded at last in dyeing the dress in dark blue.  05
- (10) There was no water in the pond.
- (11) I have never seen such a wonderful sight.

B 次の下線部の句の種類(名詞句, 形容詞句, 副詞句)と文中での働き(主語, 目的語, 補語, 修飾語)を言いなさい。修飾語の場合はどの語句を修飾・限定しているかとも言いなさい。

- (1) He has no house to live in.
- (2) We often saw her walk in the park.
- (3) To tell the truth, I have no money with me.
- (4) Reading in the dark room is not good for the eyes.
- (5) To see her is a great pleasure for me.
- (6) Would you mind opening the window?
- (7) They ran all the way, arriving just in time.
- (8) I want you to tell the truth.
- (9) The vase on the table is of Italian make.
- (10) She was laughed at by her classmates.

C 次の下線部の節の種類（名詞節，形容詞節，副詞節）と文中での働き（主語，目的語，補語，修飾語）を言いなさい。修飾語の場合はどの語句を修飾しているかも言いなさい。

- (1) I know that she is diligent.
- (2) As it rained, we could not start.
- (3) When the man saw a policeman, he ran away.
- (4) This is the most difficult problem that I have ever had.
- (5) I'll go and see her whether you object to it or not. 06
- (6) No one can tell when they will arrive.
- (7) Did you understand what he said?
- (8) Make hay while the sun shines.
- (9) He is the last man that would do such a thing. 07
- (10) She ran so fast that she soon overtook them.

D 次の文を指示に従って書き換えなさい。（p.471 以下を参照して）

- (1) When I rose the next morning, I found that I was in a spacious room. (単文に)
- (2) There is no hope that he will win the race. (下線部を gerund を用いて)
- (3) She is not ashamed that she was very poor when she was young. (下線部を gerund を用いて)
- (4) I assisted him, but he has failed. (単文に)
- (5) The beginning of the war made it impossible for her to go abroad. (複文に)